

毎朝、階下からピアノの音が聞こえる。唱歌や童謡のメロディを片手で弾いている。数曲のいつもの曲がいつもの順番で繰り返される。おもしろいほど終わる箇所も次に始まるフレーズも同じ。

下りていくと、ピアノのまわりに自室から持ち込んだ大量の衣類が散乱している。その日に着る服を選べないのだ。ちぐはぐな服を着ているのはいい方で、パジャマのままだったり、上はパジャマで下はパンストだけだったり。

そんな恰好でピアノ弾いてたの？ と最初は笑った。次には、これとこれを着てね、と並べておいた。でも、歯を磨いて戻ってくると、お気に入りのブラウスを引っ張りだし、裸にじかに着ている。やれやれ。

そして、毎日、「今日、わたしはどうするの」と質問してくる。日付はもちろん、時間も曜日も季節も曖昧になっている母にルーティンを説明しても無駄。「今日のはむろだね。何するのかな。楽しみだね。さ、準備しよう！」と盛り立てる。

約2年前、「前にも言ったよね」とつい言葉を荒げてしまったことが何度かあった。結局、ますます母を混乱させて、ようやく気が付いた。そういえば、同じ昔話エピソードを1日に何度も繰り返し、同じ化粧品を大量に通販で注文していた理由はこれか。徒歩1時間もかからない道のりを6時間かかっても帰宅せず心配したことがあったが、無理はない。

それでも、母の「認知症」を受け入れるには抵抗があった。非社会的で会話の下手な母がデイサービスで楽しめるはずはないと頭を抱えていた。でも、幸いなことに、紆余曲折の結果、昨年4月にはむろに出会うことができ、いまや母にとって、はむろは保育所のように安心できる日常の居場所となっている。おかげで2年前には触れようとしなかったピアノを毎朝機嫌よく叩くようになった。

それでも、はむろから帰宅後の一人で過ごす2、3時間はブラックボックス。置手紙と一緒にテーブルに乗せたおやつは完食するが、手紙の内容は理解していない。そして、退屈のあまりか、いろんなことにチャレンジしてくれる。トースターでキーウイが破裂しそうになっていたり、ばさばさのご飯がお鍋で出来上がっていたり、オーブンで加熱された冷凍ご飯の容器が溶けて変形していたり、冷凍庫の食材を机の上にきれいに並べてあったり、トイレの水道が出っぱなしになっていたり。

最近では、「たすきの会」にも助けてもらえるようになり、安心して帰宅できるようになった。

予想外の出来事にどう対処するか、工夫して知恵比べしよう。素直に他人の支援を仰ごう。とりあえず母が無事に日々を過ごしてくれたらいい。

自宅で普通の会話ができないストレスは、遠方で仕事をしている子どもたちとのメールや電話で解消する。私ののんきな性格を受け継いだ娘は、「おばあちゃん、自然になってよかったねえ。今、一番幸せなんじゃない？」と笑っている。子どもたちにとっても、母が元気でいてくれることは活力の源だ。

生真面目に完璧を目指す優等生主婦で、孫育てまでしてくれたんだから、もう卒業。90歳まで元気でいてくれたんだから、もういいよ。義務感から解放され、その都度思いついたことをやって人を困らせても気にならなくなったなんて幸せだ。

素になった母は、たしかに若いときよりずっと穏やかな表情をしている。